

<報告・記録>

教職生にみる教師的資質

黒田 宣代

東亜大学 人間科学部 心理臨床・子ども学科
kurodan@toua-u.ac.jp

《要 旨》

本研究は、近年の学校教育環境と教員採用事情を考察するにあたり、将来、教員を目指そうとする学生の教師的資質をみつめるものである。研究の背景には、文部科学省の中央教育審議会（2011年7月）等で示された教員に求められる資質能力についての課題がある。

今回、まず、教職生の教職への指標を探るために、教職科目の講義におけるタスクを通して得たデータをもとに分析を試みた。

データ分析調査期間は、2020年度1年間（2020年4月～2021年3月）である。有効回答数は52（全回答数65，無効回答13）である。主な分析は、ホランド（John L. Holland）の職業選択理論（適職診断）を活用し、学生自身よりフィードバックされたデータより見つけたものである。

キーワード：教員養成／中央教育審議会／生徒（進路）指導論／教育相談論／ICT教育活動

1. 研究の目的

本研究は、将来、教員を目指そうとする学生の教師的資質をみつめるものである。ここでは、その資質を探るために、教職科目の教材におけるタスクを通して得られたデータをもとに分析を試みる。その際、「教育相談論」ならびに「生徒（進路）指導論」の二つの教職科目に焦点を当てた。

上述の二つの科目は、本学では3年次の前期、後期に設定された教職必修科目である。2021年（令和3年）度の卒業予定者までが対象となる旧課程では、「生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目」として位置づけられている。一方、2022年（令和4年）度の卒業予定者からが対象となる新課程では、「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」とされている。そして、とりわけ、「教育相談論」においては、カ

ウンセリングの基礎的な知識と方法とを含むことが求められている。

今般のコロナ事情により、本学でも2020年前期よりほぼすべての科目でICTによる遠隔授業が導入された。そして、筆者担当の上述の二つの科目においても、ユーチューブビデオとインターネット上の幾つかのサイトを援用したりリモート講義としてオンデマンド形式で進めた。

本稿では、2020年度1年間（2020年4月～2021年3月）という期間の中で、上述二つの遠隔授業において、学生に課したタスクのフィードバックを通して推察される学生の教師的資質を探り整理してみたい。

1-1. 近年の学校教育環境と教員採用事情

教職課程学生における将来のキャリアとして、教師的資質を問うに当たり、昨今の教員採用事情を鑑みればその質的ハードルは決して高くはないと言える。

その理由の一つは、以前より、団塊世代教員の大量退職とともに大量の新規採用が生じた、あるいは現在も生じているということが要因にあがる。つまり、門戸が広くなり、特別高度な技術や豊富な教職知識や実践を持ち得ていない学生においても採用をクリアできるという状況が予測される。特に小学校教員採用試験においては、全国的に低い倍率が続いており、本学の方の学生らが受験する九州・山口地区のそれにおいても、ここ数年、ほとんどの自治体で倍率2倍を下回っている。

中央教育審議会による「教員の資質能力向上特別部会一審議経過報告のポイント」(2011年7月)の要旨を見ると、2011年からの10年間で、教員全体の3分の1の教員が退職すると報告されている。したがって、経験の浅い教員が大量に誕生し、先輩教員から新人教員への知能・技術の伝承が困難になると指摘されている¹。つまり、団塊世代(1947年生～1949年生：2021年現在の72歳～74歳)の教員が大量退職していく2010年頃からその現象が始まり、古参と新参教員の大移動とも言える2020年頃までは、上述した問題を注視していく時期だと考えられていた。しかし、何故かこのような流れが今なお継続しているかのようでもある。

おそらく、その要因の一つに学校教員のブラック化が挙げられると推察される。教員の常態化する時間外労働や多様化した個々の児童・生徒対応による激務な環境が「ブラック労働」などと揶揄され、一昔前の憧れの人気の職業ともいえた「学校の先生」は、今やそのイメージを崩壊させつつある。かつ、保護者対応にも職務の中で多くの時間が占められているということは言うまでもない。モンスターペアレントは、最近では「モンペ」とスラング化しているところからもその数は少なくないと察せられ、こうしたことが学校の「ブラック化」に拍車をかけているとも言えるだろう。巷では、せっかく教員採用試験に合格し採用されたにもかかわらず、1年後には離職するというケースも少なくないと聞く。特に小学校ではその傾向が顕著であるようだ。

その昔、教員という職業が憧れの人気の職業であった背景には、高学歴・高収入という位置づけにあり、社会的にも尊敬される羨望の的であったからであろう。「きつい」・「汚い」・「危険」と言われた3Kのブルーカラー的労働と比較して、そうしたワードを一切彷彿させないホワイトカラーの職業であったからだと察する。しかし、今や社会状況は一変し、今日、誰もが卒業で誰でも教員免許の取得可能な高学歴化状態にあっては、保護者や児童・生徒が学校教員に対して「尊敬」や「羨望」というまなざしの生まれる素地を無くしてしまっていると言える。さらに、ネット社会により情報発信、受信が簡単に可能になることで、物言う保護者の存在に教員が萎縮してしまうという環境も生まれた。そして、教員は、様々な児童・生徒そして保護者に対応していかなければならず、時間外労働が膨大に増えていく中で、今や「憧れ」や「人気のある」と言ったイメージが消失された職業となってしまったのである。

こうしたことを踏まえ、文科省は以前より「チーム学校・チーム支援」や「コミュニティ・スクール」など教育環境改善にむけて幾つかの教育政策を打ち出してきた。しかしながら、学校内の教員における世代構成の不均衡により、新人教員を育てるという意味においては余裕のある環境とは言い難い。また、コロナ事情により1年中が繁忙期となることで、新規採用教員がこうした状況に上手に適應できるのか疑問が残る。学校を取り巻く環境は、上述の事柄を加味すると決して健康的な状態とは言い難く、特に、昨今の新人教員は、採用試験そして採用後を通してみつめると、その資質に疑問を呈している状態と言える。

1-2. 現代の教員に求められる資質と能力

上述した中央教育審議会による「教員の資質能力向上特別部会一審議経過報告のポイント」(2011年7月)によれば、教員に求められる資質能力として「高度な専門性と社会性」、「実践的指導力」、「コミュニケーション力」、「チームで対応する力」が挙げられている。こうした中で、現役校長の評価によれば、新人教

員においては実践的指導力やコミュニケーション力等が十分身につけていないとの指摘があがっている。

1-3. 現代の大学生の気質

筆者自身、教職課程を運営するにあたり、常日頃より学生の教師的資質に首を傾けることが少なくない。現代の大学生（若者）がこれまで受けてきた学校教育とは何だったのか。私見では、総じて個の自律（自立）より集団で足並みをそろえることが協調されているように察せられ、したがって、学生自身の自主性を感じられないことが少なくない。さらに、常に教員や周りに依存することに流れているように見え、手取り足取り指導をしてもらうことを前提としている温室育ちの学生が醸成されているように見えなくもない。

こうした学生を垣間見るにつれ、これでは、大学卒業後、社会で羽ばたこうにもおそらく挫折してしまうだろうと推察してしまう。そして、予想通り、なかなか社会では通用しないよう卒業後、短期間で離職するケースが少なくないと聞くⁱⁱ。

過日、ある新聞で教育に関する以下のような記事があった。かいつまんでその記事を簡単に記すと以下のような内容となる。

「戦後の日本では、復興が第一であったため結果的に学校とは製造業の工場で働く人を育成してきた。その育成には、①偏差値がそこそこ高い②素直③我慢強い④協調性が高い⑤先生の言うことを聞くという5要素がベースとなっている。素直であれば常識を疑わず、我慢強ければブラック企業でも耐え、協調性が高いと周囲に付度し、先生の言うことを聞く人は上司に反抗しないということである。そしてこれらは今なお、その傾向にある。しかし、工場労働ならそれでもよいが、これだけでは新しいアイデアや豊かな個性が生まれるはずがない。そして、こうしたことに気が付いている文科省は、新学習指導要領において、「問いを立てる力」、「探究力」が何よりも大事だと言っている。要するに、社会常識を疑う力を養うということが必要である。そして、まず探究力を大人が持たなけ

れば、子どもに教えられるわけがない。つまり、探究力を育てず5要素のままでは日本はいずれ衰退していく」と述べられていたⁱⁱⁱ。

確かに上述したこの社会常識を疑う力（探究力）というのが現代日本の教育に必要なだと筆者も感じるが、ただここで指摘された①から⑤の資質を現代の若者（児童・生徒・学生）が持ち得ているかと言えればそれもまた疑問である。つまり現代日本の若者は、ホワイトカラーだけではなく、ブルーカラー的の職業にも適していないのかもしれない。

こうした考察を踏まえ、次に教職大学生のキャリア的な資質について見つけていこう。

2. 教職科目「教育相談論」のタスク

近年、「いじめ」「不登校」「自殺」等いっこうに減少傾向にない学校教育病理において、「教育相談」の重要性が高まっている。文科省によれば、教育相談は、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の専門家だけに特化した「カウンセリング」領域ではなく、教職員自身も「カウンセリング・マインド」を持って、子どもに接しなければならないと指摘している。そして、文科省は『生徒指導要領』^{iv}で、「教育相談において活用できる新たな手法」と題して、以下の7つの技術を紹介している。

- ①「グループエンカウンター」
- ②「ピア・サポート活動」
- ③「ソーシャルスキルトレーニング」
- ④「アサーショントレーニング」
- ⑤「アンガーマネジメント」
- ⑥「ストレスマネジメント教育」
- ⑦「ライフスキルトレーニング」

2-1. 調査方法——そのⅠ

本講義では、上述の①～⑦のうち、④「アサーショントレーニング」^v（「教育相談論」講義【前期】第9回目に実施：教職3年生対象）と⑤「アンガーマネジメント」^{vi}（「教育相談論」教職3年生対象）講義【前期】第8回目に実施）において学生にセルフ調査してもらった。

その際、まず、講義の内容について説明し、その後、ネット上の無料サイトを紹介し、そのサイトを利用して学生自身の振り返りとして実施してもらった。

まず、「アサーショントレーニング」とは、「主張訓練」と訳され、対人場面で自分の伝えたいことを相手にしっかりと伝えるためのトレーニングである。理論上、3つのタイプがある。まず、対人場面での対応により、「アサーティブ」（自分も相手も尊重する自他調和タイプ）。次に、「アグレッシブ」（自己中心で攻撃的な自己本位タイプ）、そして、「ディフェンシブ」（相手中心で消極的な他人本位タイプ）に分類される。そこで、学生自身がどのタイプに属するのかを回答してもらった。結果、今回の調査では、どのタイプが多い、あるいは少ないということではなく、3タイプに分散していたという結果であった。最終的に、学生自身の自己覚知として繋がっていったと思われる。

2-2. 調査方法——そのII

次に、「アンガーマネジメント」とは、自身の中に生じた怒りの対処法を学ぶもので次の6つのタイプに分類される。①「公明正大タイプ」（マナーやルールを厳守する正義感や使命感の強いタイプ）。②「博学多才タイプ」（向上心が強く、自分できちんと考えて物事を判断し、完璧にやりきることが大切だと考える人）。③「威風堂々タイプ」（自分に自信があり、いつも前向きでリーダー的な存在）。④「天真爛漫タイプ」（自分の想いや考えを素直に表現し、フットワークが軽い行動派）。⑤「外柔内剛タイプ」（温厚な性格で自分のルールや価値観を大切にしている人）。⑥「用心堅固タイプ」（いつも冷静で慎重に物事をこなす人）である。これらのタイプがそれぞれの性格的（性質）な特徴にあわせたかたちで怒りを生じさせる。

学生には、「アサーショントレーニング」と同様に初めに解説をし、その後、サイト上の質問に回答していくかたちで自身について調べてもらった。結果、今回の調査でも、「アサーショントレーニング」と同様どのタイプが多かったということではなく、それぞれのタイプに分散

していたという結果であった。最終的に、この学習も学生自身の自己覚知に繋がっていったと言える。

3. 教職科目「生徒（進路）指導論」のタスク

本科目は、学生自身が教員となった際に、児童・生徒に対して「進路指導」という役割のなかで身に付けなければならない能力・技術の一つである。しかし、実際のところは指導経験もない上、そうした知識も皆無に等しいといえる。ゆえに、まずは教職生自身の志向やそれに見合う職業領域を見つめることを前提に、自身の職業診断テストを実践してもらった。

3-1. ホランドの理論

ホランド（John L. Holland）の職業選択理論（適職診断）は、キャリアガイダンス等で良く知られているもので、人の基本的性格を6タイプに分別していることから、「ホランドの六角形」とも言われている。6つのタイプとは、「現実的」・「研究的」・「芸術的」・「社会的」・「企業的」・「慣習的」となり、この中で「社会的」タイプというのが教員に適職とされている。

端的にそれぞれのタイプを説明すれば、まず、「現実的」（Realistic）とは、道具、モノ、機械、動物などを扱うことを好む。地に足がついていて実践的である。機械の組み立てや修理に関わる職業を好む。次に「研究的」（Investigative）とは、生物学や物理学関係の活動を好み、好奇心が強く学究肌で自立的である。科学や医学分野の職業を好む。「芸術的」（Artistic）とは、慣例にとらわれず創造的な活動を好み、発想が自由である。言語、美術、音楽、演劇などの創造的な才能を活かせる職業を好む。「社会的」（Social）とは、人に伝える、教える、手助けすること等に関連する活動を好み、人の助けになり友好的である。教育、保育、カウンセリングなどの職業を好む。「企業的」（Enterprising）とは、他人を導いたり、他人に影響を与えることができる活動を好み、野心的、外交的、精力的で自信家である。商品の販売や人

の管理等に関する職業を好む。最後に「慣習的」(Conventional)とは、情報を明確に秩序立てて整理できる活動を好み、責任感があり、信頼でき、緻密である。記録管理、計算、コンピュータ操作等に関する職業を好む。

現在、このホランドの理論をベースに(株)日本マンパワーと米国ACT社との共同開発により、「CPS-J」という適職診断テストがある。「CPS-J」は、ペーパーテスト方式(有料)となっており、被検者がどんな仕事に興味があるのかを見る「興味検査」と、どんな能力に自信を持っているのかを見る「能力自己評価検査」の2つの検査を抽出することができる。

3-2. 調査方法

ここでは、講義「生徒〈進路〉指導論」(【後期】第12回目に実施：教職3年生対象)ならびに「教職実践演習」(【後期】第10回目に実施：教職4年生対象)でネットサイトの「適職診断：ホランド理論」^{iv)}を援用し、彼らの職業志向を抽出してもらった。

その際、まず、実施前の講義でその内容について説明し、ホランド理論のレポートを提出してもらった。その後、ネット上の無料サイトを利用して学生に自己覚知として抽出し、結果データの提出という形をとった。

調査実施日は、3年生が2020年12月22日～2021年1月12日の期間、4年生が2020年12月25日～1月27日の期間で、大学ポータルサイト上の講義課題に回答してもらうかたちで実施した。ここで引用したホランド理論とは簡易版(無料)で、正式なもの(有料)ではない。

3-3. 調査結果

今回の有効回答数は52(全数65のうち、無効13)である。52名全員の6項目各平均値(AV.)は、表1(以下参照)のようになった。

3-3-1. 全体の調査結果

表1を見ると、「社会的」数値が69.23と他と比べて高いことが一目瞭然である。ただ、数値のMAXを100として考え合わせると、今

回の平均値としての「社会的」の高さが必ずしも、その領域に適した、あるいは能力のある領域とは判断できかねる。ちなみに「社会的」数値が100となっていた学生は、52名中9名(男子5名、女子4名)で全体の17%を占めていた。他方、「研究的」の数値は六領域の中で最も低くなっている。

表1 「ホランド六角形 全員」

(n = 52)

項目	I 現実	II 研究	III 芸術	IV 社会	V 企業	VI 慣習
AV.	52.88	33.75	48.94	69.23	43.17	41.44

3-3-2. 女子学生の調査結果

表2は、女性のみデータを抜き出したものである。それを見ると、やはり「社会的」数値が75.71と他と比べて高く、男子学生のそれをかなり上回っているのがわかる。これは女子学生の方が男子学生に比べ、「社会的」な特徴を持つと言えるだろう。また、「慣習的」の数値が男子学生と比較して高いことがわかる。一方、男子学生と同様に「研究的」の数値が六領域で最も低い。

表2 「ホランド六角形 女子学生」

(n = 14)

項目	I 現実	II 研究	III 芸術	IV 社会	V 企業	VI 慣習
AV.	52.14	31.43	42.14	75.71	38.57	46.07

3-3-3. 男子学生の調査結果

表3は、男子学生のみデータを抜き出したものである。それを見ると、やはり「社会的」数値が66.84と他と比べて高い。しかし、女子学生の数値と比べてみるとその数値は全体的に低いと推察され、一概に「社会的」な特徴を持つとは断言できない。また、女子学生と同様に「研究的」の数値がもっとも低くなっている。一方で、女子学生と比較すると、「芸術」や「企業」の数値が高いことがわかる。

表3 「ホランド六角形 男子学生」

(n = 38)

項目	I 現実	II 研究	III 芸術	IV 社会	V 企業	VI 慣習
AV.	53.16	34.61	51.45	66.84	44.87	39.74

3-3-4. 調査結果の総括

学生の職業選択検査において、表1～表3によるデータを見ると、教育、保育、カウンセリングなどの職業を好むとする「社会的」性格の学生が多かった。これは教職生全体としてふさわしい結果だとも推察される。さらに、この性格は、男子学生より女子学生により高い傾向があり、女子学生の教師的資質の高さがうかがえた。

4. 本調査研究のまとめ

今回、コロナ事情によるリモート講義を通じた調査結果ということで、意思疎通の難しさを実感した。例えば、今回のホランドの六角形調

査では、本来、サンプル数は65数となっていたはずなのだが、2割の学生がこちらの意図を把握できなかったということもあり、無効となったサンプル回答が多くなったことは残念であった。その要因は、オンデマンド形式によるリモート講義であったため、こちらが提示したタスクを学生が十分把握できず、その回答に不備が生まれたと思われる。対面授業と遠隔授業とでは、意思疎通という点においてその違いを痛感した。

5. 今後の展望

ホランドの六角形についての職業選択調査においては、学生本人だけでなく教員においても指導学生のキャリア支援を探る有意義なものと言える。今後は、日本マンパワー等による有料の検査を用い、学生のキャリア資質ならびに教師的資質に有効活用し、教職生の進路指導も見据えていきたい。

6. 参考・引用文献

中央教育審議会, 2011, 「教員の資質能力向上特別部会一審議経過報告のポイント」, (2021年11月28日取得, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/078/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2011/07/11/1307664_8.pdf).

文部科学省, 2010, 『生徒指導提要』教育図書.

日本マンパワー, 『キャリアカウンセラー養成講座テキスト3 キャリアカウンセリングの理論』pp.25-26. (出版年不明)

西村宣幸, 2008, 『コミュニケーションスキルが身につくレクチャー&ワークシート』学事出版.

出口治明, 2020, 「西日本新聞9月13日朝刊: 平和学習⑤」西日本新聞社.

(2011年7月)でサイト上にアップされ指摘されている。

- ii キャリアセンターによる情報や個人的な追跡調査より得られた結果をもとにしている。
- iii 立命館アジア太平洋大学の出口学長が西日本新聞(2020年9月13日朝刊)で伝えたこと。
- iv 本稿で取り上げる「教育相談論」ならびに「生徒(進路)指導論」は、前者が幼稚園・小学校・中学校・高等学校(以下、小・中・高校と記す)の教員免許取得における必須科目であり、後者は、幼稚園教諭を除く、小・中・高校における必須科目である。そして、この二つの科目は総論(生徒進路指導論)・各論(教育相談論)関係にある。

現在、文科省が発行している行政本に「生徒指導提要」がある。最新版発行年が

注

- i 中央教育審議会による「教員の資質能力向上特別部会一審議経過報告のポイント」

すでに10年経過しようとしているが現在、新版ならびに改訂版は出ていない。したがって、その内容には、法律が変わり、用語上で文言の違いがあるものや新しい名称に書き換えられていない箇所—「少年院法」の初等・中等・医療・特別が第1種から第4種少年院に変更された部分や「情緒障害児短期治療施設」が「児童心理治療施設」と名称変更した—がある。しかしながら、教員採用試験の出題で取り上げられている箇所が多いため、この行政本を教科書として使用した。上述のことから、本行政本の取り扱いには慎重を期す。

- v 「アサーショントレーニング」の診断については、<https://life-and-mind.com/assertion-11917>の無料サイトを紹介します、そこに学生自身がアクセスし、各学生が自己診断を行った。
- vi 「アンガーマネジメント」の診断については、<https://mynavi-agent.jp/dainishin-sotsu/canvas/2017/12/post-38.html>の無料サイトを紹介します、そこに学生自身がアクセスし、各学生が自己診断を行った。
- vii 引用したホランド理論による適職診断は、<https://motivation-up.com/whats/jobtest.html>の無料サイトを紹介します、そこに学生自身がアクセスし、各学生が自己診断を行った。正式なもの（有料）では、質問項目が多々あるが、ネット上のは無料のため質問は27問程度にとどまっていた。しかし、私自身の診断において有料と無料とを比較した結果、さしたる誤差もなかったため、ネット上の診断にそれほどの違いはないものと推察される。学生には、自身の診断結果図を入れて、添付ファイルで送信してもらうことで回答を得た。

The teacher-like quality seen in teacher-training course student

Nobuyo KURODA
Faculty of Human Sciences
Department of Psychology and Child Education
kurodan@toua-u.ac.jp

【Summary】

In considering the school education environment and the situation of teacher recruitment in recent years, this research looks at the teacher qualities of students who want to become teachers in the future. In the background of the research, there is a problem about the qualifications and abilities required of teachers shown by the Ministry of Education (Central council for Education).

This time, I tried to analyze the data obtained through the tasks in the lecture in order to find an index for the student's teaching profession.

The data analysis survey period is one year in 2020 (April 2020 to March 2021). The number of valid responses is 52 (65 in total, 13 invalid responses). The main analysis looked at the data feedback from the students. The data is based on John L. Holland's theory of career choice (appropriate employment diagnosis).

【keyword】 Teacher training / Central Council for Education / Student (career) guidance theory / Educational consultation theory / ICT educational activities